

教宣 せぶん

いつかもらえる「オマケ」

分裂前の話しですが、東海社との合併が発表された後の臨時大会に、当時の加藤全損保本部委員長が来賓で挨拶されたことがありました。加藤委員長は、自らの経験を通して、東海社という業界のトップカンパニーと合併していく日動社という企業の行く末や、私たちの組合の前途が、ある程度予見できていたのでしょうか。挨拶の中で「敵がだれかを見誤るな」という意味深なことを力説されていました。その後の日動社の「進路」は、加藤さんの予見通り、「対等合併」から「吸収合併」という道をたどりました。組合でも分裂を策動されました。ともすれば労々対決になりかねない状況や、同じ釜の飯を食った昔の仲間に「裏切られた」「裏切った」などという場面を、いくつか繰り返しながら、私たちは今日を迎えています。そういう場面を迎える度に、加藤さんのあの時の言葉を思い出し、「向き合う相手を見誤らないように」「ベクトルは常に東海経営」と言い聞かせ、私はこのイバラの道を歩んできたつもりです。この「原理・原則」は、これからも決して忘れないように胸に刻んでいくつもりです。

この前提を踏まえて、これからの話しを聞いて下さい。今回の「通知・提案」では、ほとんどの者がデメリットを被ります。置かれている環境や立場の違いで、転身支援金という一時金をもらいたいという方がいるにせよ、そういうケースでも長い目で見れば、社員として定年まで働いた方が当然メリットはあるわけです。しかし、定年やみなし定年を迎えて代理店になろうと考えていた方、唯一この方たちだけは何のデメリットも被りません。デメリットと言えば、「いま」労組にいればもらえるはずの転身支援金がもらえないということだけです。言い換えればメリットを享受できないというだけです。

私たちの組合の中に、様々な事情から、転身支援金という名の一時金が「いま」欲しいと思う方がいて、自らが被るデメリットと引き換えに、その一時金を手に入れたい、だから組織を離れたいと言うなら、まだ理解できなくもありません。しかし、どんな事情があるにせよ、メリットが享受できないから、そのメリットを享受するために、一時金を取りに行くという考えは、私には到底理解できません。「デメリットと引き換えにしてでも欲しい」というのと「メリットが享受できないから欲しい」というのを、同列に見てはいけないと思います。

退職金規定は何ら変わらないわけですから、「メリットが享受できないから欲しい」

という人は、退職金は満額もらえます。転身支援金は言わばオマケのはずです。そのオマケが、「いま」もらえないから他労組に行くという行動に、「あなたは何のために全損保に残ったのか？」と率直に問いたいと思います。「あなたのオマケが欲しいという行動で、後に残ったデメリットを被るほとんどの者がどれだけ嫌な思いをしますか？」と言いたいです。大きなデメリットを被る仲間のために、後輩のために、「しばしガマンしてもらえないでしょうか？」「一肌ぬいてもらえないでしょうか？」と囁きたいです。都労委という第三者機関の判断のように「もらえないことはありません」のです。いつになるかはわかりませんが、いつか必ずそのオマケはもらえるのです。いつかもらえる、それもオマケの、たかだか200万くらいの金のために、仲間や組織の元から去っていく「進路」が、決して得だとは思えません。

様々な環境や立場の違いがあるので一口には言えませんが、今回の「通知・提案」は残りの勤続年数が長ければ長いほど、被るデメリットは大きいと言えます。いっそ若ければ、第2の人生にもつぶしが利くという点では、これから「もの入り」の時代を迎える30歳代後半から40歳代がもっともデメリットが大きいのかもしれません。

事情があってノドから手が出るほど一時金が欲しいけど仲間や組織のために最後まで踏ん張ろうと思っている人がいます。もう自分には失うものがないから若手のために提訴団に入ったという囑託の方もいます。提訴団に入って人生を賭けて巨大資本とたたかっていこうという者がいます。日本の労働者のために立ち上がったという者もいます。この仕事に見切りをつけて退職金をもらって第2の人生を考えていたけど仲間のために人生設計をずらした人もいます。その根底には「みんなは一人のために、一人はみんなのために」という精神が息づいています。

そういう者の人生や志と比較した時に、いつかもらえる「オマケ」のために、仲間や組合の方針に背を向ける人生が、私には陳腐なものに見えて仕方ありません。